混合(下)

 　　Puney　Loran Seapon

【前回のあらすじを簡潔に言ってもらうと】

勇気「まあ、あれだ。上巻では、俺達警察と、どっかの殺し屋が追っかけている少女が、まゆみと接触。そして中巻では、藤二と殺し屋が接触。なんかごちゃごちゃと話して終わった、と思ったら、まゆみはあっという間にホテルに連れ去られ、そこであられもない姿に――」

まゆみ「されてないからね？　嘘言わないでね？」

勇気「はいはい……まあ、そんなところじゃねぇの？」

まゆみ「あと勇気、言うこと言わないと！」

勇気「ああ、そうだったな。これクロスオーバーだから。『弾丸』から読むことを勧める」

まゆみ「それもそうだけど！　他に言うことあるでしょっ？」

勇気「ん？　後は、【あとがき】で一ページ使っちまって、そのせいで制限ページ数をオーバーしちまったから、どうしても【あとがき】が読みたい奴は作者の名前でググってサイトに来いってくらいしか……」

まゆみ「サイトの告知じゃ無くて、『ここまでお付き合いしていただいて、ありがとうございます』って言おうよっ？」

 変態(？)

「……にゃろう」

　は、早足で廊下を歩いていた。時折口を次いで出る言葉に、あまり意味は無い。

　だが、ただ何となく、彼はそう言わずにはいられなかったのだ。

　何故ならば――

「おじさぁん、五万円でどぉ？」

「やだぁ、このお兄さんなら、三万で充分じゃなーい？」

　声を掛けられ、勇気は足を止める。半眼をつくり、そう言ってきた女子生徒の胸ぐらを掴む……のは流石に抑えたが、それでも思わず上がりかけた手は、微妙な位置で固まっていた。

　そんな彼が余程ツボにはまったのか、二人の女子生徒は馬鹿笑いしながらその場を去って行く。

「こんなことなら、ブタを連れてくれば良かったな……」

　これで何回目だろうと、外に待たせている同僚の顔を思い出しながら勇気は嘆息する。

　いや『嘆息した』と言ったが、もっと言えば、その同僚の顔を思い出して、勇気はさらに憂鬱な気分になってしまったのだが。

　挨拶も録に出来ない彼が、まともに聞き込みなんかできるとは、勇気は到底思えなかったのである。

　それにしても、勇気が廊下を少し歩くだけであの調子だ。果たしてここの生徒は、彼が警察官だと理解してあのような発言をしているのだろうか。

　これが今の日本の高校生かと思うと、その内生まれてくるであろう自分の子供の将来が不安になる勇気だった。

 弾丸(？)

　まずいことになった。

　藤二の奴に外に連れ出された俺は、必死で藤二から逃げる算段をつけていたのだが……悲しいことに、その目論見は全て失敗に終わっていた。

　なるべく不自然にならない程度に行動していたのだが、これ以上は危険だろう。

　もう腹を括る他無いが、それにしても――

「なあ藤二。どこに行くのかそろそろ教えてくれ」

　流石に、目的地を教えてもらえないまま三十分近く歩かされるのは、嫌がらせにしては度が過ぎていると思う。

「ははは、先輩、もうすぐ分かりますよ」

　この台詞も、もう何度聞いただろう。一応、聞き込み捜査に協力して欲しい、とは言われたのだが、連れ出されてから今の今まで、それらしいことは何もしていない。

　まして、俺は殺し屋だ。不安になるな、という方が無理な話しだろう。

　だが、俺のこの不安は加速することとなる。何故ならば、

「さあ先輩、ここですよ！」

　藤二に連れてこられた先が、おっさんのの通っている……そして、藤二やおっさんから教えてもらった、あの二人の少女が通っていた高校だったからだ。

　これは……ラッキーと捉えるべきだろうか？　自然に情報収集が出来る。

　一瞬、そう思ってしまった自分がいることに気がついたが、すぐに思い直す。そもそも藤二と一緒にいる時点で、そんな訳が無い。

「じゃ、先輩。中で捜査一課の人達と待ち合わせているので、合流しちゃいましょう」

「おいおい……俺以外にもいるのか？　だったら、俺は必要ないんじゃ……」

「いや、『人達』って言いましたけど、たった二人ですし。人手は多いにこしたことはありませんから」

　ほらみろと、俺は心中で頭を抱える。

　複数人で、俺の事を監視する気か。こりゃ、面倒な事になった。

 変態(？)

「ほうほう、ＴＯＵＪＩクンの先輩となｗｗｗ」

「あ……どうも」

　いきなり一般人が聞き込み捜査に加わると聞いて、一瞬怪訝そうな顔を見せたものの、勇気の同僚の……通称ブタはいつも通りだった。

　よく言えばフレンドリーと言えなくもない態度のブタに、藤二の連れてきたその『先輩』とやらは、剣呑な目を向けて困惑したような雰囲気を出すという、実に器用な事をしている。流石に藤二の先輩も、まさか康介のような人間が警察官だということは予想できなかったらしい。

「ところで康介君。勇気君はどこかな？」

　藤二が、ここにはいないもう一人の同僚のことを、ブタにしか聞こえないように小声で聞くと、ブタは学校の方に視線を向ける。

どうやら一人で聞き込みを続けていることを察した藤二は、ボソボソっと康介に『とある事』を伝えた。一瞬眉を潜めたブタは、藤二と藤二の先輩に交互に見たものの、色々と理解したらしい。

ブタの様子からそれを確認した藤二は、再び自分の先輩の方に向き直った。

「じゃあ先輩、あと一人はすでに聞き込みをやっているみたいなので、一旦合流しちゃいましょう」

「そ……そうか」

　えいえいおー、みたいに拳を突き上げて言った藤二に、彼の先輩はただただ流されるままであった。

「……ぁん？」

　藤二が『校舎前で待っているＺＥ☆！』とメールを送ると、それを受け取ったもう一人の同僚、勇気はすぐにやってきた。

　どうもイライラしているような様子で歩いてきた彼だったが、藤二と康介の側にいる人物を見て、一瞬毒気を抜かれたようにピタリとその場で立ち止まる。

で、紹介され、これから自分達と行動を共にする旨を藤二が伝えたら一転、これだった。

「勇気君。まるで般若の（ｒｙ」

「中々面白い顔を作るね！」

「……なんかすみません」

　ふざけたことを抜かした二人に、勇気の青筋は破裂寸前である。それに同情したかのように頭を下げる藤二の先輩が、あろうことか勇気にとっては救いであった。

　藤二が連れてきた先輩とやらが、藤二や康介みたいなやつだったら、恐らく勇気の怒りは怒髪天を衝き、周りの人は美しき血桜が三輪、アスファルトの地面に咲き誇るのを幻視することになったであろう。

「……ったく、仕方ないか。初めまして、木村勇気です」

「苦労されてますね……心中、お察しします」

　曰く、『藤二の先輩』という彼は、どこか疲れたような様子で勇気に微笑みかけてくる。

どうやら、この人も藤二に振り回される役回りらしいと、どこか勇気は彼に親近感を持ってしまっていた。思わず、握手を求めてしまったほどである。

彼も同じことを考えたらしい。ほぼ同時に手を差し出してきた。が、

「……あ、もしかして、左利きなんですか？」

　彼の差し出してきた手が左手で、勇気は自分の右手を引っ込め、代わりに左手を差し出しながらそう聞く。

「あ、すみません。気を使わせてしまって……勇気さん、でしたか？　藤二の奴がお世話になっています」

「あ、いえ、気にしないでください。つーか、すみませんね。うちの同僚がご迷惑をおかけしました」

　ガッチリと握手を交わしながら、二人の会話は続く。

「藤二の奴は、昔やっていたアルバイトの後輩なんですよ」

「うわ……面倒な後輩だったでしょう？　俺はあいつが中学生だった時から見ていますけど、あいつは昔からこうなんですよ。ちっとも変わらない」

「中学生の時から藤二を？　それは……苦労の多い学生時代ではありませんでしたか？」

「分かりますかっ？」

「分かりますっ！」

「あー、お二人さん？」

　意気投合した勇気と藤二の先輩に、額に汗を浮かべた藤二が控えめに割って入る。その隣では、ブタが呆れたような目線を二人に投げかけていた。

「本人の目の前で堂々と悪口を言うのはちょっと……」

「それよりも仕事をだね……ｓｍｈ」

　いつもならこの発言に対して「『ｓｍｈ』ってなんだ！」と怒鳴る勇気も、今ばかりは二人から目を逸らすしか無い。藤二の先輩も同様だ。

　ちなみに『ｓｍｈ』というのは、『Shaking My Head』の略である。

 弾丸(？)

　さて、三人か。

　俺は、今目の前でこれからの聞き込みについて話している藤二、勇気さん、康介をジッと観察していた。

　一番に警戒すべきは、やはり藤二だろう。勇気さんと康介は、一般の警察官とあまり変わらない。少なくとも、藤二みたいに『実は別の部署なのに捜査一課に手を貸している』ような人達では無い。しかもこう言っちゃ難だが……

靴底のすり減り方とか、指の腹や爪だとか、そこら辺を見るに、他の警察官より劣っている感じだ。藤二と同期ってことは、現場に出て間も無いが故か。

とは言え、油断は出来ない。能力がどうであろうが、相手は警察だ。

だが、それにしても。

俺は、勇気さんをちらりと見る。まさか、藤二の扱いに苦労している人が、自分の他にもいるとは思わなかったのだ。思いかけず興奮したせいか、ちょっと饒舌になってしまった。下手なことは喋らなかったか少し心配だ。

もし俺が殺し屋じゃなければ……少し歳は離れている感じだが、普通に友人になれたかもしれない。

そんな彼は、今はスマートフォンの画面に目を落として、眉を顰めている。と思ったら、顔を上げた。

指があまり動いていなかった所を見ると、メールのチェックでもしていたのだろうか？

「あれ、勇気君。どうしたの？」

　藤二も同じことを思ったのだろう。スマートフォンをスーツの内ポケットにしまう勇気さんに、そう聞いた。

　一瞬だけ逡巡した勇気さんだったが、言ってもいいと判断したのか、ゆっくりと口を開く。

「いや、まゆみから連絡が無いな、と思ってな。一時間ちょっと前にメールしたんだよ。『聞き込みが長引きそうだから、夕飯は外で食うことにした。俺の分は作んなくていい』ってな。仕事に関係無い事だから、気にしなくていい」

「む？　まゆみクンから連絡が無いだって？　それは、一大事じゃないのかい？」

　なんか知らない名前が出てきたが、見れば藤二も、いつもの人を食ったような笑顔は何処へやら、わりかし真剣な顔で勇気さんの、スマートフォンが仕舞われている場所を見ていた。

　どうやら藤二と康介はその『まゆみ』という人物を知っているようだ。

「ちょっとおかしくないかな？　まゆみさんって、確かどんなに忙しくても、勇気君のメールには十分以内に必ず返信するよね？」

「ああ。最低でも、『分かった』とか『了解』とか、下手すると空メールを返してくる時もあるな」

　二人の会話を聞くに、どうも勇気さんと、その「まゆみ」さんとやらは、恋仲か、もしくはそれに近い何かなのだろうな。送られてきたメールに十分以内に返信するとか、余程の相手じゃないと、中々出来ることじゃない。

「まゆみクンは、勇気クンから何時連絡が来てもいいように、スマホの電池は必ず一定量以上に保っているからねぇ……勇気クン、ＧＰＳは確認してみたのかい？」

「おいおい、ちょっと待ってくれ。俺にも説明してくれないか？」

　流石に黙っていられず、俺は話に割って入った。

　ここで疑問を口に出さなければ、変に怪しまれるかも、と思ったのもある。だがそれ以上に、気になることがあったのだ。

　なんか藤二と康介は、まゆみさんについて色々知りすぎていやしないだろうか？

　いや、『恋人へのメールの返信は十分以内にする』とか『電池は一定以上に保つ』とか、他人に話す奴は話すだろう。だが、さっき会話をした感じでは、勇気さんは俺と少し似ている気がする。

　だから、例えこの二人が同僚、いや百歩譲って『友人』だとしても、俺ならこの二人には、自分の恋人の事はペラペラ喋ったりしないと思ったのだが……

 変態(？)

　藤二の先輩に、その後輩が勇気とまゆみについての関係を簡単に説明する横で、勇気はブタに言われた通り、ＧＰＳでまゆみのスマートフォンの現在位置を調べていた。

　検索画面を見つめながらも、勇気は心の中で首を傾げる。藤二とブタはああ言っていたが、まゆみが返信をどうだとか、スマホの電池の量はいつもこうだとか、そもそも勇気自身は知らなかった事だ。

　勇気が、その理由について考え始めた時、

「あいつら、なんで知って……ん？」

　スマートフォンの画面に『見つかりませんでした』という、無機質な文字が映し出された。

「勇気クン、どうか……む？　『見つかりませんでした』、とな？」

「なんだってっ？」

　ブタの声に、藤二が、彼にしてはやや大きめな声を出す。

　そして自身も勇気のスマホの画面に映し出された文字を見ると、おもむろに顎に手をやる。

　その顔は真剣そのもので、いつもは見せないその表情に、勇気は少し驚いていた。

　藤二の先輩も、こんな藤二は見たことが無いのだろう。目を丸くするとは、まさにこのことである。

「ちょっと、勇気君達を盗撮している動画をチェック――」

「おいこら藤二！」

　突然のカミングアウトに、勇気は引き攣った笑顔で藤二の胸ぐらを掴んで引き寄せる。頭突きのおまけ付きで、だ。

「てめぇ、科捜研とはいえ警察官のくせして、盗撮たぁ何事だよっ？」

「はっはっは、勇気クンｗｗｗ　科捜研は警察官じゃないよ？」

「そうだよ勇気君。科捜研は警官じゃなくて、技術職員――」

「いや、そうじゃないだろう……」

　藤二の先輩も、左手の親指と中指で自身のこめかみを押さえて溜息を吐いていた。

「おい藤二貴様。『迷惑防止条例違反』及び『プライバシーの侵害』、後は盗撮した場所によっちゃ『軽犯罪法違反』も犯しているし、それに『住居侵入』も……」

「盗撮した場所は君達の家だ。でもトイレや風呂場は盗撮していないから『軽犯罪法違反』は犯してないし、僕は家の敷地内には入っていないから『住居侵入』も大丈――」

「大丈夫な訳があるかぁっ！」

　ここは学校の敷地内。勇気のアッパーカットを顎に受けて伸びた藤二が、多くの若者の好奇の目に晒されたのは言うまでも無いだろう。

「……で、盗撮による罪がどうのこうの、というのは置いておいて」

「置いておかねーぞ。後でちゃんととっちめてやるから覚悟しやがれ」

　数分で目が覚めるや否や、そんな事をほざいた藤二に、勇気は半眼で睨む。

「なあ藤二。さっきお前、勇気さんとまゆみさんの家の敷地内には侵入していないって言っていたけど、どういうことだ？」

　呆れつつもそう聞いたのは、藤二の先輩である。そんな彼に、得意気な顔をしたのは何故か康介、つまりブタだ。

「おいブタ、まさか貴様……」

「その通りだよ勇気クンｗｗｗっ！　君達の家にお邪魔させて貰った時に、盗聴器とカメラは僕が――」

　その言葉は最後まで続くことは無かった。勇気の強烈なボディーブローが、ぽこんと出たブタの腹にぶち込まれたからである。

「……ったく、油断も隙もありゃしねぇ」

「まあまあ勇気君。絵里さんと凛ちゃんには許可を貰っているからさ。そう怒らないでくれないかな？」

「そ……それに、まゆみクンはこのことは知っているんだ。仕掛けるにあたって、断りを入れたからね。知らないのは君だけなんだよ」

「あ、い、つ、等……っ！」

　今明かされた衝撃の事実に、帰ったら正座の一つでもさせようと決意した勇気だった。

　ちなみに藤二の先輩は、話についていけないようで、その場で棒立ちになっていた。口は開きっぱなしという有様だ。

「まあ気を取り直して、動画をチェックしていこう。僕のスマホでも見られるけど、画面が小さいし、勇気君と康介君には動画をメールで送信するよ。先輩は申し訳ないですけど、僕と一緒のスマホでお願いします。あ、協力してくれますよね？」

「あ、ああ……」

　ノーとは言えないようにするその言い様に、藤二の先輩のみならず、勇気の頭も痛くなる。

　やがて、藤二からメールで動画のデータが送られてきた。だが……

「……っ」

　勇気のメールには本文も添えられており、一言、

『先輩に注意して』

　と書かれていて、思わず勇気は藤二の方に目を向ける。藤二は視線だけで、

『後で説明する』

　と言ってきた。

　驚くのは、まだ早い。動画をチェック――まあ、勇気と藤二の先輩は、終始不承不承といった感じだったが――してから少しした時、ブタが素っ頓狂な声をあげたのだ。

　何事かと、他の三人が康介のスマートフォンの画面を見ると、そこに映っていたのは――

 友達(？)

　私、伊藤まゆみは、目の前の少女から目を離すことが出来なかった。

　今日出会ったばかりの女の子に、何だか知らないけど良く分からない所に連れ込まれ、こうしてベッドの上に拘束されていれば、当然目を離すことなんて出来はしないけど、理由はそれだけじゃ無い。

　今目の前にいる少女の後ろに、突然別の女性が現れた……ような幻覚を見たから、とでも言えばいいのかな？

　でもそれは、例えば目の錯覚だったとか、蜃気楼的な現象があったとか、この鼻をくすぐるオトメユリの香りに当てられたとか、そんなものじゃ無い。

　そう思える程、とてもリアルな女性だった。

　でも、なんでだろう。今目の前にいるこの少女の姿が、私にはよく分からない。さっきから、目が霞むのか、この子がどんな容姿をしているのか、頭に入ってこないのだ。

　ううん、ちょっと違うかも。『容姿が頭に入ってこない』んじゃなくて、『色んな容姿に見えるから、どれが本当の彼女か分からない』と言った方がいいのかな？

　分からないと言えば、この子の名前もそう。さっき彼女が教えてくれたはずだけど、今は全然覚えていない。

　もっと言うと、頭の中に、彼女の名前の余韻がまだ残っているんだけど、それが段々と消えていく感じ。

　でも、私にはそんなこと、今はどうでも良かった。

「ここは……どこ？」

　そう。今、このはっきりとしない頭の中に入れなきゃいけないのは、ここがどこなのか、ということ。

　どう見ても、私はこの子に拉致され、多分監禁ないし軟禁されているんじゃないかな。まさかこの歳になって、誘拐されるなんて夢にも思わなかった。

「ここは……ですよ？」

　あれ……よく聞こえなかった。

　でもその時、私の視界にあるものが入る。ベッドの横に、何かのスイッチやダイヤルみたいなものが、いくつかあったのだ。

　試しに、そのダイヤルの内の一つを回してみると……これ、なんだろう？　なんか部屋がライトアップされたんだけど。

　凄く……凄く、嫌な予感がする。

　目の前の少女が、小さくピューっと口笛を吹いたのを見て、私は全てを理解し、そして……

　いや、想像なんてしてない。してないけど……っ！

　自分でも分かるくらい、カーっと顔が熱くなってしまった。

 変態(？)

「……で、こう……でね？」

「いや、分かるけどよ……でも……」

　まゆみの家まで歩きながら、勇気と藤二はヒソヒソと早口で話していた。ブタと藤二の先輩は、さきに車でまゆみの家まで向かってもらっている。これには当然理由があり、藤二がそうしようと提案したのだ。

　そしてその理由は当然、さっきの『藤二の先輩』について、話し合うためである。ちなみにブタは、もうこの話を聞いている。

　藤二曰く、どうやら彼は、あまり大きな声で言えない、いわば『裏稼業』を営む人らしいのだが、どうにも勇気は信じられないでいた。

　それもそのはずで、藤二は別に、何か物証を持ってきたわけではないのだ。ただ単に、『少し会話をして、そう思った』からだそうなのだが……引っかかった理由が、勇気が納得するのには微妙なものだった。

「藤二。言いたいことは分かるが……それじゃ、俺が納得する材料としては弱すぎるし、そもそも発想がぶっ飛びすぎてる。たまたま、そう言っただけかもしれねぇだろ？」

「いや、でもさ。ちょっと変でしょ？　先輩、この事件の事、よく知らないって言っていたのに、写真を見せたら『女子高生』って断定したんだよ？　言っておくけど、僕は『女子高生』なんて一言も言っていないからね？」

「……まあ、その点は俺も気にはなったけどさ。写真を見て、そう思っただけかもしれない」

「でも写真に写っている女子生徒は、高校一年生でしょ。しかも僕の見た感じじゃ、中学生って言われても納得する顔なんだよね。断定するには、難しいんじゃないかな」

「……んー」

　勇気は、額に手を当てて考え込む。

　藤二が、今勇気が追っているこのヤマの他に、もう一つの事件を調べているのは、勇気もすでに知っていた。しかも、藤二が独自で調べている方のヤマのホシ、つまり犯人は、今、勇気達が捜査している事件の目撃者であるかもしれないのだ。

　だがその犯人かつ目撃者が、藤二の先輩だと言われても、勇気は簡単には納得が出来ない。

　だが、

「分かったよ。取り敢えず、注意して見てみるわ」

　『人を見たら泥棒と思え』という言葉がある。取り敢えず、勇気は藤二の言ったことを、頭の片隅に置いておくことにした。

　まあ正直な所、勇気は別の方に気が行ってしまっていて、藤二の言ったことを無意味に保留しているだけに過ぎなかったのだが……これは、責めるべきか否か。

「……やっぱり、帰ってきてないか」

　もう日も完全に落ち切った、午後七時。

　まゆみの家にやってきた勇気は、そう呟く他無かった。

　ある程度、覚悟はしていたが、それでも落胆は隠せない。自分達以外に誰もいない家の中で、勇気の吐く溜息が、白く曇る。

　藤二の送ってきた動画に写っていたのは、まゆみが、今、勇気達が追っている事件の犯人と思わしき人物と一緒に談笑している所だったからだ。ただ、少女の顔はピンボケしていたが。

　いやまあ、正確には『途中まで談笑していた』と言うべきだろう。数十分くらいしたら、まゆみの様子が突然おかしくなって、あっという間に床に倒れたのだ。

するとどうだろう。今までまゆみと談笑していた少女は、まゆみを担いで、どこかへ向かってしまったのだ。その時の勇気の心境といったら、筆舌に尽くし難いと言っても過言では無い。

　その先からは、室内のカメラではどうしても追えず、何か手がかりを求めて家まで来たのだが……見つかったものと言えば、手がかりになるかどうか分からない『匂い』だった。

　恐らくオトメユリと思われるこの香りを、勇気はまゆみの家で嗅いだことが無い。この『匂い』は間違いなく、あの少女のものであろう。

　再び溜息を吐きかけた勇気の肩に、そっと手を乗せた人物がいた。

 弾丸(？)

　俺は、勇気さんの肩に手を乗せていた。

　これは別に、同情とか、そんな類の気持ちからでは無い。

　俺だって、あの少女……『須藤響一郎』なのか『天瀬響花』なのか、どっちなのかは知らないが、とにかくそいつに生きていてもらっちゃ困る。でも、あまり殺す気にもなれないのも事実だ。

　そして勇気さん達からすれば、この少女は逮捕しなければならず、それは俺からすれば『最悪の結末』である。彼女の供述によっちゃあ、俺も逮捕されるからな。

　では、勇気さん達にとって『最悪な結末』とは何か。それは考えるまでもなく、まゆみさんの死であり、しかもそれは容易に起きえるだろう。あちとら、経験が、実績がある殺人犯だ。

　そうなると、例えばの話だが……『まゆみさんが助かって、事件の犯人に逃げられる』というのは、警察官としてはともかく、勇気さん達からすれば『最悪な結末』では無いのではないだろうか。

　で、だ。この場合、俺はどうかって聞かれると……答えは『かなりハッピーな結末』ということになる。俺は藤二の監視から外れ、その上ターゲットの顔を確認することも出来るからだ。さらに可能性は低いが、『藤二が俺に持つ疑念も晴らせる』という嬉しい副産物までついてくるかもしれない。

　するとどうだろう？

　これは、言ってしまえば『ＷＩＮ‐ＷＩＮ』の関係。ちょっと危険なやり方かもしれないが、今から俺が選ぼうとしているこの選択肢が、俺にとって、恐らくベストなもののはずだ。

　だから、

「勇気さん」

　俺は、そう話しかける。

話は、この家で手がかりを捜すのを手伝っていた時に、藤二の奴から聞いていた。勇気さんとまゆみさんの二人が今日、何時にどこで何をしていたのか。何故お前がそんなに詳しく知っているんだ、と言いたくなる程だった。

その結果……

「まだ、何とかなるかもしれません」

　俺の探している、あの少女がどこへ行ったのか……それが、分かったのだ。

いや、

ここは、『分かるだけの材料が揃った』というべきだな。

 変態(？)

　午後七時半。

　勇気とブタは、屋上にいた。季節が季節なせいか、この時間にもなると、結構肌寒い。風は無いが、二人は少し震えていた。

全ては、藤二の先輩が推理した通りに、ここまでやってきたのである。

　ここは、まゆみの家から一番近い店員のいないホテル……それがまさかブティックホテルだとは勇気もブタも思っていなかったのだが、そこの屋上だ。

　藤二の先輩曰く、ここにまゆみがいる可能性が一番高い、ということだそうだ。そしてその予想は、見事に当たっていたのだが……

「ああして見ると、何というか……」

「ザ・ヒットマン、って感じだねぇｗｗｗ」

　勇気とブタは、この屋上の向かいで、ライフルを構えてスコープを覗いている藤二の先輩を見てそう呟いた。

　部屋のカーテンは、ほぼ全て閉まっているはずなのだが、彼が言うには、そのカーテンの隙間からまゆみの姿が見えたそうだ。これは藤二も確認したから、間違いないだろう。

　それで、である。勇気とブタがここで何をしようとしているのかというと……二人は自分の腰に、それぞれ消防用のホースを巻きつけていた。ここのホテルの消防用設備の中からお借りしたのだ。

　そしてホースのもう片方を、柵の手すりに固く結んでいることから、何をしようとしているのかは一目瞭然だ。

二人は眼下に広がる黒いコンクリートを見て、ゴクリと唾を飲み込む。

　こんな時こそ、藤二が発明品を何か貸してくれればいいものを、出てくるのは輪ゴムばかり。しかも意味不明な輪ゴムばかりで、『耐火性輪ゴム』はまぁ百歩譲って許すとしても、『耐水性輪ゴム』とか『耐震性輪ゴム』とか、一体何の用途に使うのか分からないものを出してくる始末。

　挙句、その製作者である藤二は「全部繋げれば、命綱として使えなくもないんじゃないかな？」とか言いやがるもんだから、取り敢えず勇気は藤二の頭に一発、鉄拳を落としておいた。これならいつもみたく、版権に引っかかる危険性の高い発明品の方がいいと本気で思ってしまった程である。

 友達(？)

　時間が分からないことが、こんなに不安だとは思わなかった。

　私は駄目元で、もう一度部屋の中を見渡す。でも、現在時刻を示すものは、何一つとして見つからない。

　この部屋にあるものは、今私が寝ているこのベッドと、隣の変なスイッチのついた機械。そしてその機械の上にあるティッシュと、後は窓際にあるテレビと小さな花瓶くらいだろう。ここから見えるのは、それくらい。

　私をここに連れてきた少女は、今は入浴中。この隙に逃げ出したいけど……生憎、両足を鎖で拘束されていて、ここから逃げることは難しそうだ。

それでも諦めたくなくて、さっきから鎖を引っ張ったりとか色々試してみたりしているのだが、ビクともしない。

　あの子がお風呂に入ってから、どれくらいたったのかな？　体感だと十分くらいだと思うけど、あまりアテにはならないと思う。

　それを証明するみたいに、脱衣所の扉が開く音が聞こえて、

「勇気、勇気……勇、気……っ！」

　思わず小声で、まるで呪文のように何度も呟いていた。

　私にとって、最愛の人の名前を。

 弾丸(？)

　まさか、こうなるとは誰が予想しただろう。

　今、俺は腹ばいになってライフルを構え、スコープを覗いている。まさに、いつも俺が『殺し屋』の仕事をしている時みたいに、だ。

　そして俺の隣では、藤二が俺と同じように、俺と同じ銃を構えてスコープを覗いていた。

　このライフルは、藤二がＳＡＴから借りてきたらしく……いや、俺は全く信用していないんだが……俺がいつも使っているライフルでは無い。

　こいつは、俺が大学時代、射撃サークルに所属して、さらに大会でトップになったことも知っているので、こうして今回、スナイパーの役目を押し付けられたのだ。

ちなみに警察所属の狙撃手は、狙撃の際は必ず二人一組で行動する。だから、今、俺のパートナーは藤二……なのだが、こう言っちゃ難だが、かなり危なっかしい。手が震えているから、これじゃ狙いがちゃんと定まらないだろう。

「藤二。お前、あぐらをかいて構えてみろ」

　俺の計画には、こいつ等にもしっかり仕事をして貰わないとなので、真面目に注意しておく。

「……あっ、なんか良くなった気がします」

　言われた通りに構えを直すと、藤二が面白そうな声でそう言ったのが聞こえた。

「ああ。人は、体型とかによっちゃあ、あぐらで撃つ方が狙いが定まるからな」

「へえ。ところで先輩、頼んだ僕が言うのもアレですけど、腕とか鈍ってないんですか？　射撃サークルにいたのだって、もう十数年も前でしょう？」

「まあ、今でも毎日、射撃の練習は欠かさないからな。使っているのはエアガンだが……何とかなる」

　これは本当の事だ。

「で、先輩。どう撃ちます？」

　藤二の作戦では、少女の姿が確認でき次第、俺と藤二で威嚇射撃。その後、勇気さんと康介が上から奇襲する、という事になっている。

「そうだな……」

　だが、俺的にはそれでは困るのだ。あくまでも、あの少女は逃がさなければならない。

　と、すると……

 友達(？)

「あれ……まゆみさん。ふふふ……無駄ですよ」

　私が逃げようとしているのがすぐに分かったのか、微笑を浮かべながらも少女は私に近づいてくる。

　バスローブ姿で出てきた彼女は……女の私の目から見ても、中々扇情的なものだった。

　でも、私にそんな事を気にする余裕は無い。私の目は、ただ一点、

「こない……こないで……っ！」

この子の右手に握られた、小さなナイフだけに集中していた。

 【混合】

　カーテンの隙間から少女が姿を確認した瞬間、藤二は静かに引き金を引く。彼の先輩である、殺し屋も同時に引き金を引いていた。全て、この殺し屋の提案によるものだ。

　そしてほぼ同時に、一人の男が屋上から飛び降りる。新米刑事の勇気だ。本当はもう一人飛び降りる予定だったのだが……手すりに結びつけただけでは流石に不安が残ったので、やむなく康介に引っ張ってもらっていた。

　飛んでいく弾丸は二発。発射位置も引き金を引いたタイミングも、殺し屋が藤二に完璧に合わせた。

違うのは、狙った的だ。この的は、当初の、藤二の予定通り、あの須藤響一郎、もしくは天瀬響花の足元である。

だが、殺し屋はそれを許さない。だからこそ、自分の後輩と色々なものを合わせたのだ。

撃ち出された二つの弾丸は、その進路方向が途中で交わる。

つまり、位置やタイミングが同じであれば、『弾丸同士が途中でぶつかる』のだ。

そして、殺し屋の目論見通り――

ぶつかった弾丸は、それぞれ別の方向へと進路を変える。

一つは、何やら怪しげな機械の上に乗っているティッシュへ。

一つは、ドアについている……鍵へと。

店員のいないこの手のホテルは、扉はオートロック式のものが多い。お金を入れるなりなんなりして、初めて鍵が開く。

だから、あの少女は、もしあの場に誰かが突然乱入してきたら、自分もすぐには逃げることが出来ないのだ。

殺し屋は、そこに目をつけた。物理的に鍵を破壊して、彼女を逃がそうと考えたのである。

結果、撃ち抜かれたティッシュ箱は、その中身を宙に撒き散らし、扉についた鍵は、破裂したような音を立てた。

少女はそこで以上を察知し、慌てて扉の方へと走り出し、

そしてその刹那、バンジージャンプしてきた勇気が窓を派手に割って中に入る。

殺し屋は細く息を吐き、少女は扉を蹴破って廊下に逃げた。

そして勇気は――

恋愛(？)

「まゆみ！　無事かっ？」

「勇気っ？」

あまりの出来事に、まゆみは目を白黒とさせている。まあ、無理もないだろう。勇気もあまりの事に、正直頭が追いついて無いのだ。

藤二達はどうしているだろうかと、彼等がいる方向を見るも……二人共、もうそこにはいない。恐らく、逃げた少女を追っているのだろう。

ブタもいないが、あいつは多分、こっちに向かって来ているんだろうな、と勇気は思った。

「で、どうなんだよ？」

「……何が？」

　頭に『？』を浮かべるまゆみに、勇気はやれやれと息を吐く。

「いや、だから……怪我、無いのかよ？」

「うーん、かすり傷はあるかも。でも……」

「でも？」

「酷い怪我とかは……無い。だって、させられる前に、助けに来てくれたから」

「……そうか。なら良かったんじゃねぇの？」

　二人は思わず、プッと吹き出したのだった。